

はしがき

「社会福祉の歴史を研究しています」というと、「えっ、ああ、歴史ですか」と相手を戸惑わせてしまうことがある。「社会福祉」という言葉から連想されるのは、たとえば介護などの現実的な場面であり、「歴史」という言葉から連想されるのは、たとえば中学校や高校で勉強した歴史であり、その2つを結びつけようとして戸惑うのかもしれない。

「歴史はほんとうに大切だと思います」、そういつてもらえることもある。福祉の仕事に従事している現場の方からそういわれると、気が引き締まる。歴史を学ぶ意義を深く実感しているのは、日々現実と向き合っている実践者たちなのかもしれない。

社会福祉の歴史を初めて学ぶ人だけではなく、改めて学び直そうと考えている人にも、この本が届くことを願っている。それぞれの関心に応じて読んでもらえるように、各章には基本的な説明はもちろん、その時期の特徴をより深く理解するための踏み込んだ説明も含まれている。また各章のコラムからは、歴史をとらえる視点の多様さを知ることができるはずである。

私たちが読者と共有したいのは、歴史に関心を向けることの大切さである。現在の福祉課題や制度を理解するために、過去からの変遷を知ることは有益である。特に、福祉課題の多様化にともなって個々の生活問題が複合化し、一方で問題解決のための社会資源である制度が複雑化した今の状況だからこそ、歴史というアプローチによる学習方法が効果的なはずである。

しかし、それだけではない。社会福祉をめぐる状況が急速に変化している現在、それに振り回されるのではなく、数十年、百年単位の時間の流れに目を向けて、福祉実践や制度・政策が社会の大きな変動に影響を受けていることや、長い時間を経た連年の帰結として現在の福祉実践や制度・政策があることを再確認してほしい。未来に向けての主体的な一歩は、そこから始まると信じている。

本書の企画は、小倉襄二先生や池田敬正先生に学恩を受けた人たちを中心に手伝ってもらって、社会福祉を学ぶ若い人たちにも読みやすく、なおかつ歴史研究の動向を踏まえた教科書を作りたい、という田中和男さんの呼びかけで始まった。刊行までに長い年月がかかったが、元村智明さん、倉持史朗さんという気鋭の方々のおかげで躍動感のある本に仕上がった。各章の内容はそれぞれの執筆者にゆだねられ、章ごとの調整も最小限にとどめている。さらに各章のコラムは、若手・中堅の研究者に各トピックスのエッセンスをまとめていただいた。

全体的に、地域ごとの特徴や国際的な視点に目配りするように努めた。また、社会福祉史の時期区分（感化救済事業期、社会事業期など）は歴史理解のためには重要であるが、多職種連携が求められる時代にあって多様な専門分野の読者にもなじみやすいように、前近代、明治前期、明治後期、大正期、戦前・戦中、戦後という区切りとし、戦後は1970年代で章を分けた。

本文中に、現在では不適切などの理由で使われない言葉を、学術的な観点から歴史用語として用いている場合もある。また、典拠文献の明示は煩雑を避けるため最小限にとどめた。章末、コラム末に挙げられた参考文献を通じて、ぜひ本書による学びを深めてほしい。

途中、執筆者の変更や編者の交替など紆余曲折があったが、なんとか刊行にたどり着けたのは、事実上の代表編者である田中和男さんのマネジメント力のたまものである。加えて、法律文化社編集部の方舟木和久さんによる粘り強い励ましに深く謝意を表したい。

2016年12月

石井 洗二